

中村雄二郎

「モモンセンスへの雄渾な図柄」

橋爪大三郎

社会学を専攻する私は、どうしても社会学的な関心から、哲学者の著作を読んでしまう。

われわれ社会学のなかまが議論してきたような問題が、哲学ではどのように論じられているか？ そっくり同じ問題でなくとも、かたちを変えて論じられているのではないか？ あるいはそもそも、問題として認知されていないのか？

同じような垣根越しの関心は、哲学者の側にもあるらしい。たとえば廣松渉氏が、アメリカの現象学的社会学者、A・シユッツの問題構成に関心を寄せたり、大庭健氏が、最近の著書「他者とは誰のことか」で、ドイツの機能主義社会学者、N・ルーマンの仕事の踏まえたり、とお互いさまである。

社会学者は哲学に、思考の厳密学であることの変わらぬ尊敬を覚えている。また、自分たちの社会学が、そこから分かれてきた伝統ある学問に、郷愁を感じている。哲学者は哲

学者でおそらく、社会学に、人間のいつそう具体的で現実的な生き方の手触りみたいなものを求めているのだろう。

\*

七〇年代にはいると社会学では、それまで続いてきた機能主義の「専制支配」が覆えされ、「意味学派」と呼ばれる一群の試みが現れてきた。この傾向は、八〇年代に入ると、いよいよわが国にも本格的に波及し、多様・多彩な展開を見せるようになる。私自身もこうした流れの末に連なり、人間の言語活動を社会関係の基礎に据えなおす、〈言語派〉という立場を試みている。

人間や社会が、意味と不可分であるなどと、いまさら言うのもおかしいと思うむきもあろう。しかし、わざわざそういうことを言い直さなければならぬ事情が、当時の社会学にはあった。意味学派登場の必要は、それに先立つ機能主義が

どのようなものだったかを見れば、理解できる。

機能主義の社会学論は、時代思潮として、戦後の社会学界を席捲した。その源泉はひとつでないけれども、最も影響力をもったのは、アメリカの社会学者タルコット・パーソンズである。彼は、M・ウェバー、E・デュルケーム、サイバネティクス、近代経済学、小集団実験などを養分にして、五〇年代に構造・機能分析(structural-functional analysis)という立場を樹立。これは、富永健一、吉田民人、小室直樹らによって日本でも独自の展開をとげ、六〇年代から七〇年代を通じて、圧倒的な影響力をもった。

社会も、それを成り立たせる個々人も、十分に複雑なシステムであると直観していた。ただし、複雑であっても、何らかの秩序をそなえている。ではそれは、どのようにしてか。これがパーソンズの抱いた疑問だった。

パーソンズは社会学に、機械論そっくりのシステム論を持ちこむつもりだったわけではない。彼は、人間が意味を知っており、めいめいの欲求や価値観や動機にもとづいて行動すること(主意主義的行為理論)を、よく承知していた。そこで彼は、アンチノミー(二律背反)に直面する。自由な(ということとは、外部世界の拘束を受けない)諸個人の集まりである社会が、どうして一定の秩序(拘束性)をもつことができるのか(「ホッブスの秩序の問題」)。この、一般には解けるはずのない問題を前にして、彼は、特殊な場合にならそういう秩序(均衡)が実現すると言えそうだと考える。それが、規範解だ。

もし社会に、秩序が行きわたっているなら、人びとはそれをすすんで、規範として受け入れ、分け持つようになりやすいだろう。逆にもし、人びとが規範を分け持っているのなら、そこには社会秩序が実現するはずだ。ということは、社会秩序は、人びとがそのように規範に志向する場合に、安定して実現するのではないか。それが社会の機能というものだろう。とパーソンズは考えた。



◎ 中村雄二郎氏

多くの変数が複雑に連関した相互関係をいう。パーソンズは、

キーになる概念はいろいろあるが、まずシステム(体系)。

ものとなった。人びとの「自由」も名ばかりで、個性もなしに社会に埋没している。これに怒って、さきほどの意味学派の人びとが、登場してくる。彼らはこれを、機能主義の欠陥であるとした。社会を、システム、構造、機能などの言葉よって、捉えようとするからいけない、と考えたのである。

\*

六〇年代の異議申し立て運動が、七〇年代の社会学になだれこんだ観もあったが、構造・機能分析は彼らの攻撃の恰好の標的となっていく。文句を言い立てる側の意味学派は、一枚岩でなく、いくつかの「ミニ・パラダイム」に分かれていた。「現象」をキー概念に、人間の主観的経験と現実構成を重視する、現象学的社会学派。会話のやりとりなど日常的な場面の観察・分析から出発する、エスノメソドロジー派。社会過程の象徴的な側面に注意を集中する、シンボリック・インタラクシヨニズム派……。これらの学派が総じて主張するのではない、社会を生きる人間ひとりひとりが、社会システムに従属するのでない、かけがえのない位置を占めていること、彼らが社会的現実を紡ぎ出さなければ、社会秩序も存立不可能なこと、であった。

こうして問題は、意味の客観的・公共的な側面に、向けられていく。

パーソンズの問題のたて方に、問題があったのではないか。自由な主体としての人間をせつかく思い描いても、それと別

に社会秩序を考えたのでは、結局人間は、「自由」でも「主体的」でもありえない。この発想では、「社会化」(社会秩序の内容を、個人が自分のパーソナリティ・システムに取り入れること)、つまり、社会↓個人にはたらく作用ばかりを強調せざるをえず、逆方向(個人↓社会)は問題にできなくなってしまう。

\*

そうではなくて、意味が社会的な実在であると考えよう。個人は最初から、社会的な現実を生きはしめる。それを離れて社会システムが、どこかに実在するわけではない。意味学派が総じて主張したのは、結局そういうことだった。意味が、「個人と社会」という古典的な対立を乗り越える媒介項として、社会学の中心的な記述の対象となるべきだ、というのが、システム論の洗礼を経たあと、ここ二〇年の社会学理論の主要な動向である。

\*

これに類する動きは、機能主義の側でも生じている。パーソンズの後継者と目されるN・ルーマンは、構造・機能分析を換骨奪胎し、意味の選択プロセスを中心に据えた社会システム論を構想する。ここでは、パーソンズが描いたような社会や個体の実在性は、最初から最後まで想定されない。

わが国の機能論者も、意味を重視しはじめている。たとえば今田高俊は、社会システムを、自己組織システム(つまり、自分のなかに根拠を持ちえず、不断に自己変容をとげるシステム

ム)ととらえた。社会システムにとって、個人は外部(環境)。個人の与える創発的な新奇性・予測不能な攪乱をまえに、いつもゆらいでいる。パーソンズはこれを見誤り、あたかも固定した社会システムが個人々の「環境」であるかのよう

に想定したのではないか。

今田(「自己組織性」創文社、「モダンの脱構築」中公新書)によると、パーソンズの発想は、高度成長期の産業社会特有のものである。これからは、モダンの脱構築、意味システムの創造的な構成が、主題となる。個人々に過度の画一性を強いた効率社会から、個人々の多様性を支援する意味システムの時代へ。こうした転換が、社会学の理論現場でも起こってきた。

\*

このような学派の消長や、問題関心の激しい推移が、時代に関わる社会学のあり方だ。同じような時代との緊張関係を、哲学の動向のなかに見てとれることが、私には興味深い。たとえば「共通感覚論」をはじめとする中村雄二郎の仕事は、社会学が問題にせざるをえなかったことを、ちょうどトンネルの反対側から掘り進むかたちになっている。

哲学と社会学では、アカデミック・トレーニングのあり方

も、古典とされる文献も、構築のスタイルもまるで異なる。だがそうした相違は、問題の深度に比べれば、表層的なもの

社会学では、意味の公共性、社会性、客観性が強調された。それは、意味が主観的な問題として、社会システム(社会学の記述の本来の対象である)とされる実在」と切り離され、二義的な扱い受けてきたことに対する抗議の声である。いっぽう哲学では、意味の問題はいつだって中心的なテーマであり続け、その復権を改めて強調する必要などさらさらなかったはずである。哲学では問題の配置が異なる。代わって位置づけが大きく変化したものは、身体であった。

人間の意味の世界が、主観的、かつ客観的に存在することの根拠。それが身体である。身体に注目すれば、個人々の生きる意味の世界が、(社会の)客観性から切断されたまま個人々の内部に閉じられるのでなく、その外側に広がっていく様相が見えてくる。共通感覚というのは、ばらばらな主観の性能に純化されてきた視覚、聴覚、……等々の機能が、じつは身体上で交錯することを、よびかえたものにほかならない。共通感覚は、身体を、個々の感覚(精神機能)の織りあわさる場所として、伝統哲学の用語から呼びかえる試みであると言える。

\*

中村雄二郎の仕事が、共通感覚の問題に引き寄せられ、そこに収斂する必然を、もう少し仔細に追ってみよう。

一九七九年に出版された「共通感覚論」は、「知の組みかえのために」と副題がついている。哲学の閉塞状況を、その系



譜を逆のぼることによって、伏流していた本来の問題にたどりつき、そこを起点に問題の配置そのものを組み直そうという展望をもった試みである。内容はまことに多岐にわたり、デュシャン、戸坂潤から、アリストテレス、メルロポントイ、精神病理学、ベンサム、フーコー、デカルト、英国経験論、ソシュール、……と枚挙の暇もない。個々の論者に対する言及が簡略になっているのはやむを得ないが、その代わり、哲学史をつらぬくコモン・センス（共通感覚）の伝統を看てとうとうという雄渾な図柄が、読者に印象づけられる仕掛けになっている。

中村自身の言によつて、彼が共通感覚にかけの問題意識の深度を探つてみよう。△もともと「コモン・センス」とは、諸感覚（センス）に相渉つて共通（コモン）で、しかもそれらを統合する感覚、私たち人間のいわゆる五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）に相渉りつつそれらを統合して働く総合的で全体的な感得力（センス）、つまり「共通感覚」のことだつた▽（七頁）。△現在私たちの前に提出されている人間論や芸術論や多くの重要な問題、すなわち、知覚、身体、アイデンティティ、言語、批評の根拠、生きられる時間や空間、風景、制度、虚偽意識などの諸問題は、みんな共通感覚の問題にかかわり、そこに収斂していくときえいえるだろう▽（九頁）。このように問題の求心点にあたる共通感覚、それは、意味の客観的な流通の培地である身体の、もつとも基本的な性

能であると思われるのである。

さて、△「共通感覚」 sens commun が共通感覚と呼ばれるのは、それがすべての人間に共通な感覚だからではなく、それが「個々の諸感覚のよく規整された使用」から生まれるからである▽（五五頁）。「共通」には少なくとも、二つの意味がある。第一は人間・人間の共通性、第二は感覚・感覚間の共通性。両者は無関係でないかもしれないにせよ、さしあたり中村が考慮するのは、後者なのだ。

\*

ある人間のなかで、諸々の感覚がどのように捻じれや交錯をみせるかということが、意味の公共性・社会性にどう結びつくのか、と思ふかもしれない。けれども、意味の社会性を考えるうえで、共通感覚論は踏まえるべきポイントである。人間はどのような存在なのか、伝統的に哲学は、そのイメージを与えてきた。そして、ついにその主流を占めるにいたつたのが、モダニズム（主体／客体図式、あるいは、要素還元論だと考えてみよう。この伝統は、現実を解釈する枠組みと語彙と感受性の、ぶ厚い推積をなしている。これを剥ぎとらないと、時代の現実の新しい相が見えてこない。そういう場合、哲学の伝統にどう対抗したらいいだろうか。それが共通感覚であると、中村は直観した。共通感覚に照準することが、戦略的に重要になる。

たとえば、視覚の優位に対する挑戦。ヘンロースの立方三

角形▽（一種のだまし絵）を紹介する箇所、中村はこのべる。△部分としては成り立つが全体としては成り立たないにもかかわらず、視覚がそれを可能でもあるかのように許容すること、このことは、近代世界の視覚優位と結びついた機械論、全体は部分の総和から成るとする機械論の考え方の逆理そのものを、鮮やかに示している▽（七四頁）。視覚は本来、たかだか共通感覚を織りなす感覚のひとつで、他の感覚と協働しながら、世界の体験の構成に参画するはずのもの。ところが、その脈絡から切り離され、あたかも視覚だけが自存して世界を体験しうるかのように錯覚されるから、かえつてだまし絵に足をとられるというような逆説にみまわれる。そこに思ひいたるならば、われわれは、自分たちを捉えている感覚の体制を、気付くことができる。

視覚（観る主体）の成立が、近代的な人間個体の自立と並行する現象であること、そして、その解体の予兆が構造主義によつて語られたということならば、私もかつてのべたことがある（『はじめの構造主義』講談社現代新書）。共通感覚への覚醒が、視覚の制度、ひいては近代の諸制度の脱構築に結びつく、という戦略は、この理解に通じるものでもある。これが、構造主義と軌を一にする哲学潮流に連なっているのはみやすい。

\*

視覚につづけて、中村は、言語・時間・記憶といったテー

マにも、考察を進めていく。同じ志向は、『哲学の現在』『術語集』『問題群』（いずれも岩波新書）といった著書にも、一貫している。

共通感覚は、視覚（映像）、聴覚（言語、音楽）、そのほかの感覚や感情（……愛情？）などに切り離され、ばらばらに論じられていた。それらを、ひとつの身体上で生じる問題として考え直したらどうかと提案するのが、共通感覚論である。こういうスタンスに中村雄二郎の特徴が、よく出ているとも言えよう。彼は「テキストの読み手」である。哲学史上の多様な素材を涉猟しつつ、それを共通感覚というテーマに即して、彼の書物のなかに配列する。読者の理解は深まるだろう。ただ、頭でそれをわかることと、共通感覚が社会的な現実のなかに復権できること（近代合理主義の方法である分析理性に拮抗する、もうひとつの原理として対置されること）とは、違う（距離がある）のではないか。

\*

このような共通感覚論には、紙一重のところどころで空振りに終りかねない、きわどいところがある。視覚が特権的であるなどと、近代によつて体制づけられてしまふ以前の、諸感覚のあるがままの姿、あるがままの関係、それが共通感覚であるという。これは、①原初的であつて、しかも、②近代的原理の外部にある。ちょうど、急進的エコロジストにとつての自然とか、クリステヴァにとつてのル・

セミオティック(原記号態)とかのように、近代(この社会)の外にあって、この近代(この社会)を批判するための足がかりになつてゐる。人間は、この共通感覚を経由することで、失なわれた本来性を回復する、という。

これは、七〇年代に特有の樂天的な構図に見えてしまう。というのは、「近代を脱出し、克服する」という言説それ自身こそ、ほかならぬ近代の産物であり、近代にどうしようもな繋留されている、という皮肉で逆説的な指摘(ことにフーコーの文体)が、八〇年代の日本ではすっかりポピュラーになつてしまつたからである(たとえば、内田隆三「へ構造主義」以後の社会学的課題」『思想』六七六号)。そもそも近代から脱出すること、あるいは、ポスト近代を目指すことを語らなかつたような近代の言説が、はたしてあつたらうか。

ここまで考えてみると、近代を攻撃する「批判」的言説が持つていた効力を、再点検せざるを得ない。批判的な価値観も感受性も、ナイーブにそれを表明するだけでは、批判の効力を保証してくれない。もっとも、フーコーみたいな文体のほうだつて、自分が着地する場所を確保しているわけではささらさなくて、八〇年代を通じてのたうち回つてゐるのだが。とにかく、八〇年代は、その前の時期(共通感覚論がすんなりと、批判的言説として人びとに受け取られた当時)から、もう一段階前に進んだ恐ろしい場所に出ってしまった。

\*

つて議論を構成しているという点が目につく。こうした類似と差異に気付くことにも、哲学/社会学が垣根越しに関心をもちあつたことの利点があると言えるだろう。

中村 雄二郎(なかむら ゆうじろう)

略歴 一九二五年生まれ。哲学、思想史専攻。明治大学法学部教授。演劇、言語、人類学などに対する幅広い造詣に裏打ちされた、数多くの思想書やエッセーを著している。『感性の覚醒』『哲学の現在』『共通感覚論』の三部作をはじめ、『魔女ランタ考』『術語集』など、そのときどきの関心をリードする著作群の、愛読者は多い。

主著 『パスカルとその時代』(一九六五年、東京大学出版会)『近代日本における制度と思想』(一九六七年、未来社)『感性の覚醒』(一九七五年、岩波書店)……第二章で共通感覚が論じられている)

『劇的言語』(一九七七年、白水社)……鈴木忠志氏との共著)『哲学の現在』(一九七七年、岩波新書)……共通感覚論の内容を、初学者に分かりやすくのべている)

『知の変貌——構造的知性のために』(一九七八年、中央公論社)……構造主義と、その登場を必然とした哲学的伝統について、平易にのべる)

『共通感覚論——知の組みかえのために』(一九七九年、岩波書店)……本文参照)

『精神のトポス——対話現代思想』(一九七九年、青土社)

『知の旅への誘い』(一九八一年、岩波新書)……山口昌男氏との共著)

『西田幾太郎』(一九八三年、岩波書店)

社会学の意味学派に、では、そういう心配はないのか。

意味学派は、共通感覚論とごく近いところで、身体を論じ、意味を論じている。しかし、それが直面している困難は、もう少し違ったものになつてゐる。近代(社会)を、その外にある批判の規準を足がかりにして批判しようという戦略ではなくて、そもそも社会がどのような意味過程から出来あがつてゐるかを、直接説明しようとする戦略をもっているから。

こういう意味学派が共通して直面するのは、自己言及の問題である。

現象学派であれば、多様な現実のうちなにか支配的な現実となるか。エスノメソドロジーであれば、理解がどのように根拠づけられるか。言語ゲーム論であれば、言語ゲーム全体の記述の妥当性をどのように確保するか、をめぐって自己言及が生じてくる。ルーマンの議論、今田高俊の自己組織性論、大澤真幸の身体論では、自己言及そのものがモデルに組み込まれ、社会モデルとして主張されている。

総じて、社会学の意味学派は、八〇年代のフーコー的文体をふまえて理論形成していると言つてよい。批判理論みたくに樂観的ではありえず、自分の根拠を自分で生産しながら、なおかつ社会の客観的な学であろうとする本質的な困難のままで、一様に苦しんでいる。

こういう場所からみると、共通感覚論は、きわめて興味ぶかいにもかかわらず、あいかわらず真実と虚偽の二分法によ

『魔女ランタ考——演劇的知とは何か』(一九八三年、岩波書店)……パリ島のコスモロジーを導入に、ベイトソン、子供、女性、ドラマなどについて縦横に論じる)

『述語集——気になることば』(一九八四年、岩波書店)

『トポスの知——箱庭療法の世界』(一九八四年、TBSブリタニカ)……河合隼雄氏と共著)

『哲学的断章』(一九八六年、青土社)

『西田哲学の脱構築』(一九八七年、岩波書店)

『終末への子感 欲望・記号・歴史』(一九八八年、平凡社)……多木浩二氏と共著)

『問題群——哲学の贈りもの』(一九八八年、岩波新書)……全部で一五の選りすぐった問題を掲げ、哲学史に思索を遊ぶ入門書)

(はしづめだいさぶろう・東京工業大学助教授・社会学)